

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 北前船寄港地・船主集落

祝！日本遺産



江戸時代から明治にかけて栄えた北前船。その寄港地であった敦賀に今も残る北前船ゆかりの文化財や技術が日本遺産として認定されました。

北前船に関連する文化財などが日本遺産に！



北前船で運ばれた昆布の加工技術



敦賀湊を出入りする北前船の目印として1802年に建てられた石積み灯台



江戸時代、蝦夷地（北海道）から北前船で搬送されたニシンを収納した大型土蔵



北前船で財をなした廻船問屋・大和田荘七が1892年に創業した大和田銀行の初代社屋



北前船で搬送された荷物を琵琶湖水運を活用して輸送するために、1815年に整備された運河の遺構

敦賀市と南越前町を含めた北前船に関連する11自治体が文化庁に申請していた「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」が北前船寄港地・船主集落」が4月28日に日本遺産に認定されました。今後、北前船寄港地・船主集落（※）が持つ魅力を活かした観光振興や、関連自治体などが期待されています。

日本遺産とは？
地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語る「ストーリー」を文化庁が認定するもので、平成27年度に創設

北前船が運んだ昆布と敦賀

北前船が運んだ物資の代表に、北海道の昆布があります。江戸中期以降の敦賀には、北前船を通じて昆布やニシンなど松前物と呼ばれる北海道からの荷物が飛躍的に増えました。昆布の一大集荷地となった敦賀には多くの手すきおぼろ昆布職人が集まり、昆布の加工技術が発達し、おぼろ昆布の一大産地となりました。

現在でも手すきおぼろ昆布の全国シェアが80%以上を超えるなど、昆布加工品は敦賀を代表する特産品となっています。

これからの取り組み

今後は認定された11自治体が共同して、北前船寄港地・船主集落のストーリーを国内外に発信、歴史文化を体感・継承するための環境整備、次世代継承のための人材育成、北前船に関する都市連携の強化、ブランド構築といった取り組みを進めていきます。



今回認定された日本遺産を構成する11市町

されました。ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形・無形の文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外へ戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的とした制度です。

日本遺産に認定された北前船ストーリー
江戸時代、北海道・東北・北陸と西日本を結んだ西廻り航路は経済の大動脈であり、この航路を利用した商船は「北前船」と呼ばれていました。北前船は、米をはじめとした物資の輸送から発展し、船主自身が寄港地で仕入れた多種多様な商品を、別の寄港地で販売する買

各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落は、今も日本海沿岸を中心に数多く残り、時を重ねて彩られた異空間として人々を魅了しています。今回認定されたストーリーは、88件の文化財で構成されています。敦賀市の文化財は、昆布の手すき加工技術、洲崎の高燈籠、鯨蔵、旧大和田銀行初代本店、正田舟川の5件です。（ページ上段の写真参照、括弧内は所在地）

interview

少なくなったとはいえ、敦賀には全国的にもずば抜けた数の昆布すき職人がいます。日本遺産の認定をきっかけに、地元の人たちにもっとそのことを知ってもらえたら

福井県昆布商工業協同組合 理事長 美濃 修二 さん



敦賀は全国のおぼろ昆布生産量の80%以上を占め、全国のスーパーなどで出回っているおぼろ昆布は、ほぼ敦賀で加工されたものです。数年前の調査では、敦賀には昆布加工に携わる人が1500人ぐらいいて、その中で昆布すき職人は110人ほどでした。昆布生産量のピークだった30年前は昆布加工に携わる人が約500人いたといわれていたので、職人の減少は大きな課題となっています。昆布すきは、座りながらする作業なので、肉体的な負担も大きく、時代の流れとともにそういった仕事を希望する人が減っています。他の北前船の寄港地では、職人が2、3人になったところもあると聞きます。そんな中、敦賀に今でもこれだけの職人さんがいる理由は、北前船のおかげで昔から昆布が大量に入ってきたという歴史と、職人さんを育てる敦賀の問屋と職人の仕組みが良かったことだと思います。いくら少なくなったとはいえ、全国的に見ればずば抜けた数の昆布すき職人が敦賀にはいます。日本遺産の認定をきっかけに、地元のみならず、敦賀には全国に誇れるおぼろ昆布すきの伝統があるということを知ってもらえたらいいです。